

特集にあたって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 駿台史学会 公開日: 2013-05-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山田, 朗 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/15943

〈巻頭言〉

特集にあたって

山 田 朗

2010（平成22）年3月29日、明治大学平和教育登戸研究所資料館（略称＝登戸研究所資料館、以下「本資料館」と略す）が開館した。本資料館は、現在の明治大学生田キャンパス（神奈川県川崎市多摩区）が、日本陸軍の〈秘密戦〉兵器の研究・開発機関であった登戸研究所の旧敷地内に立地していることから、その敷地に残された登戸研究所の研究実験施設であった建物のうち1棟（明治大学における呼称「36号棟」、鉄筋コンクリート平屋建て、床面積360m²）をそのまま保存・活用して歴史資料館としたものである。

本資料館は、旧日本軍の研究施設であった建物をそのまま保存・活用して資料館としたという点でも、〈秘密戦〉に関する資料館という点でも、日本国内に類例がないきわめてユニークな資料館である。また、1つの大学が国家が行った戦争の裏面や加害の側面にまで踏み込んで検証した資料館（博物館）を設立したという点においても、立命館大学国際平和ミュージアムに次ぐものといえるであろう。

このような登戸研究所資料館の開館を記念して、本誌において特集を組ませていただくことになった。特集のタイトルは、「戦争遺跡の検証と保存―登戸研究所資料館の開館によせて―」である。本資料館は、建物そのものが戦争遺跡であり、その遺跡を検証した上で保存・活用することは、現代における〈戦争の記憶〉を次世代に継承する重要な事業である。そこで本特集では以下のような5つの柱（説明すべき目標）を立てて戦争遺跡としての登戸研究所を検証するとともに、本資料館を〈戦争の記憶〉の継承の具体的な事例として紹介し、そこでの展示コンセプト・展示方法などについて分析的に検討をくわえることにした。

本特集の5つの柱

- (1) 登戸研究所資料館の現代的意義
 - 陸軍登戸研究所とは何か
 - 資料館開設に至る経緯
 - 資料館の現代的意義
- (2) 登戸研究所と〈秘密戦〉に関する史的再検討
 - 残存する文書資料から見る登戸研究所の実態解明

本土決戦体制（地域社会戦時体制）と登戸研究所との関係

中国における〈秘密戦〉の一環としての通貨謀略（偽札散布）の実態解明

(3) 登戸研究所資料館の展示構成の特徴（歴史継承の方法）

時代背景の解説

登戸研究所の全容

風船爆弾と登戸研究所第一科

秘密戦兵器と登戸研究所第二科

偽札製造と登戸研究所第三科

本土決戦と戦中戦後の登戸研究所（登戸研究所の実態解明過程、資料館設立の経緯を含む）

(4) 大学キャンパス内の戦争遺跡の保存・活用の状況

(5) 登戸研究所資料館が開館したことによる社会的な反響

本特集のねらい

- (1) 「登戸研究所資料館の現代的意義」は本特集の総論を兼ねるもので、一般には馴染みの薄い陸軍登戸研究所という施設とその研究内容のアウトラインを示すとともに、本資料館の設立の経緯もあわせて論じ、本資料館の現代的な意義についてまとめる。
- (2) 「登戸研究所と〈秘密戦〉に関する史的再検討」の部分においては、残された数少ない文書資料からあらためて登戸研究所の実態に迫るとともに、研究所が開発した「ふ号兵器」（風船爆弾）の大量生産に地域社会がどのように動員されたのか、研究所で生産された中国・蒋介石政権の法幣の偽札がどのように中国で使用されたのか、いずれも従来は明らかでなかった部分を解明する個別実証論文を取めた。
- (3) 「登戸研究所資料館の展示構成の特徴」の部分においては、その紹介と分析は、実際に本資料館の設立準備段階から展示構成案の作成にあたった当事者に担当していただいた。また本誌には、この特集の柱を補強するものとして、本資料館の開館にあたって制作されたドキュメンタリー映画「蘇る登戸研究所 一平和への思い—」（2010年）と登戸研究所に関する文献（刊行物）の紹介も加えた。
- (4) 「大学キャンパス内の戦争遺跡の保存・活用の状況」においては、日本全国の大学キャンパス内に存在する戦争遺跡の状況を明らかにする。戦後に大学キャンパスとなった土地は、その広さを満たす関係から、戦前における軍事施設・軍需工場などであった場合が多い。明治大学生田キャンパスは、まさにその典型事例である。また、戦前から大学キャンパスであった所でも、出陣学徒の慰霊碑などの戦争遺跡が存在していることがある。このような大学キャンパス内の戦争遺跡が現在どのように保存・活用されているのかを実証的に明らかにしておきたい。

(5)「登戸研究所資料館が開館したことによる社会的な反響」では、来館者のアンケート分析を中心に、資料館開館がもたらした反響と、来館者によって新たに提供された登戸研究所に関する実物資料・情報などについてもふれ、資料館という可視化された存在が、〈戦争の記憶〉の継承に重要な役割を果たしていることについて検討する。

本特集は、かつて明治大学関係者によって行なわれた共同研究である海野福寿・渡辺賢二・山田朗編『陸軍登戸研究所 一隠蔽された謀略秘密兵器開発一』（青木書店、2003年）に続く、日本陸軍の〈秘密戦〉を支えた登戸研究所の実態に関する現段階における中間報告である。またそれと同時に、登戸研究所と〈秘密戦〉という戦争の〈裏側〉〈暗部〉をどのように私たちが〈戦争の記憶〉の一部として継承していったらよいか、資料館（博物館）という〈場〉においてどのような可視化された歴史叙述（実物展示と史実の解説）がなされるべきかという試行錯誤の末の一試論でもある。

巻頭口絵資料寄贈者・著作権者名（図版掲載順、敬称略）

原島花子，吉崎一郎，法政大学第二高等学校 育友会教育研究所，筑波大学大学院教育研究科 伊藤純郎ゼミ，伴幸雄，木下健蔵，小池汪，伴和子，山田朗，渡辺賢二，小山亮